

# 伏見稲荷から見る稲荷信仰の多様性の研究

堀井 千暉

(手塚 恵子ゼミ)

八幡神社や天満宮など、系列の社を展開している神社は日本において多数存在しているが、その中で最も系列の神社数が多い神社といえば稲荷神社である。その総数は公式の発表では三万社ほどとされているが、個人の屋敷や企業によって祀られているものを含めればその総数はさらに膨れ上がる。当然のこととしてそれだけの社があれば信仰者はより多く存在し、より多くの信仰者が存在するということはそれだけ信仰の形も多数存在するといえるだろう。そしてそれらを統括する稲荷信仰の総本山が伏見稲荷大社である。本論文ではこの伏見稲荷大社を舞台として稲荷の信仰の多様性に関して研究を行っていく。調査方法として、表出化している信仰の形の内「氏子区域」「鳥居」「塚」「講」の四つの側面から調査を進め、その裏にどのような信仰が存在しているのかを調査する。またこれら四つの要素が伏見稲荷大社という一つの場所においてどのような関係にあるのか、何らかの相関関係を持っているのか或いは全く違う形での信仰の形が一所にて各々独立して存在しているのか、といった関係に関しても調査を進めていきたいと思う。

## 1. 氏子区域から見る信仰

### 2-1. 整然とした氏子区域の形成に関して

まず、信仰の一要素として氏神としての信仰に関して本多健一氏の『京都の神社と祭り』（本多健一 2015）から考えてみる。享保二（1717）年成立の奉行所役員の行政業務マニュアルにあたる『京都御役所向大概覚』内の「洛中洛外神社祭祀之事」という項をあたってみると、伏見稲荷の氏子圏に関して『北ハ松原通南側限、南ハ洛外凡九条村辺、西ハ傾城町中堂寺村限但南ニテハ六孫王権現氏子入組アリ洛外分、北ハ宮川筋五町目南側限、東ハ大仏境遊行前町、巽ハ同境内石塔町石橋

限、南ハ同本町七町目南之端限』との記述を確認できる。この記述の中で注目すべき点として、氏子圏に関して『北ハ松原通南側限』という一節からも確認できる通りその範囲設定の基準として条坊制の通りが用いられていたことが伺える。これは稲荷に限った話ではなく、京都の主要な神社における氏子圏はいずれも条坊制を基として設定されている。信仰という物が個人の精神的なものに依る関係上このように氏子圏が直線的に整然と設定されるのは異常なことである。実際、同時期の江戸の氏子圏は複雑に入り乱れ、京都に比べ雑多なものとなっている。このように整然とした氏子区域が形成されるに至った経緯として本多氏は、自然発生的・土着的な産土神信仰と人為的な祭礼敷地の設定の絡み合いが基になっていると考察している。まず、産土神信仰についてであるが、産土は自身の出生地を指す語であり、産土神とはその守護神を意味する。稲荷に関してもこの産土神としての信仰をにおわせる文章が存在し、『七条辺ニ産マレタリケレバ、産神ニ御ストテ、二月ノ初午ノ日稲荷へ参ラムトテ、大和ヨリ京ニ上リテ（以下省略）』という一節が12世紀前半成立の『今昔物語集』の中に存在する（芳賀矢一 1921）。これによると、七条に生まれた女が稲荷を『産神』として信仰していたとされている。この「産神」というものが産土神のことを指す語と考えて問題はないだろうが、注目すべきはこの記述の中で地域が「七条」と限定されている点である。このことから、この土着的な産土神信仰の時点で人工都市である平安京の中で産土神に関する区画分けが地域ごとにある程度行われていたことが伺える。一方の人為的な範囲設定、祭礼敷地であるがこれは中世において祭りの執行費用を捻出する目的で所定の地域内の住民から金銭などの何らかの課役を課した地域を指す。稲荷の主要な祭りである稲荷祭でもこの祭礼敷地に関する記述が寛喜元



は「藁一束分ぐらいならいいでしょう」と答えた所、弘法大師は藁一束をほどいて、一本一本を繋げて稲荷山とその周辺を囲ってしまった。さらに弘法大師が「期限は十年」と書かれた証文に対して「エイッ」というと証文の“十”の文字に点が一つ足され“千”となっていた』

という説話である。勿論これはただの説話に過ぎず、実際にこのようなやり取りがされたとは考え辛い。『藤森社縁起』によると永享十(1438)年、後花園天皇の勅命により時の将軍足利義教が稲荷山山頂の稲荷社を麓に遷すにあたって当時元々そこにあった藤森社を現在の場所に遷したという記述が存在する。そこに至るまでの経緯に関しては不明瞭な点が多いものの、現在伏見稲荷大社が存在する場所には元々藤森社が存在し、そこに後から伏見稲荷が入り込んでいったという構図で間違いはないだろう。実際藤森神社の一大祭事である藤森祭では御輿が稲荷の境内の藤尾社を回る際に「土地返せ」と連呼する風習もかつては存在していたことから両社の土地に関する浅からぬ関係がみてとれる。但し藤森神社境内に稲荷の摂社が置かれるなど現在においてこの両社の関係は実際にはさほど険悪なものでもなく、あくまで行事の形式として行われているのみであると考えられる。

一方で伏見稲荷から離れて存在している氏子区域であるが、京都における他の主要な神社の氏子圏がその神社を中心として形成されていることを鑑みるに本社である伏見稲荷から離れた稲荷の氏子区域の設定においても伏見稲荷大社本社以外の何かを中心として存在していると考えられる。そこで稲荷の氏子圏内に目を向けてみると、特に注目に値するポイントとして東寺が存在している。東寺と稲荷との関係は神仏習合の時代の中であったことを鑑みても特別に深く、特に重要な物としては東寺に伝わる『弘法大師行状絵巻』の中における空海と稲荷翁との伝説が挙げられる。要約すると

『弘仁七(816)年に空海が紀州・田辺で修業していたところ、身長八尺の老翁にであった。その翁は自身を稲荷神の化身であるとし、その教えを受けるよう空海に勧めた所、空海は自身には密教を日本で隆盛させるといふ願いを抱いているとして、神に仏法の擁護を願ひ出る。そして再開の地

として東寺を定め、神と空海は盟約をむすんだ。その後弘仁十四(823)年、正月十九日に空海は天皇から東寺を賜り、同年四月十三日に東寺で稲荷翁は二人の婦人と二人の子供をつれて空海と再会を果たす。その後しばらくの間一行は八条二階の柴森の家に寄宿したが、その間空海は東寺造営のための材木を切り出す山を定めた。その地が現在の稲荷山である。また、稲荷翁が滞在していた八条の二階堂が現在におけるお旅所である』

とされている。このエピソード自体は歴史的観点から見ると空海らの密教勢力と秦氏、荷田氏の神道勢力の政治的利害関係を表すものであったとみるのが妥当であろうが、その舞台としては東寺が扱われていることから稲荷と東寺のつながりを見出すこともできる。また稲荷の本願所愛染寺の住職天阿上人により真言密教に則った神仏習合的な稲荷の行法が体系化され、また同人物は中世から近世にかけて流行した眷属信仰にも深く関与していることから真言密教と稲荷の関係の深さについてうかがえる(中村陽, 2009)。その他にも淳和天皇が病気を患った際、その原因として東寺建立のための木材を稲荷山から切り出したことによつて祟られたとされる等、建立の当時から稲荷と東寺の間に善かれ悪しかれ密接な関係があったと見て取れる。そのことは伏見稲荷の一大祭事である『稲荷祭(還幸祭)』にも表れており、神幸祭で御旅所に収められた神輿が本社に戻る際、東寺の東門前(中世では南大門内)にとどまり、東寺の僧侶数名による「東寺神供」を受ける、という行事の中に現在でも残っている。このように東寺周辺において稲荷信仰が広まる素地は整っていたが、京都の他の主要な神社群と違い本社を中心としてではなく東寺を中心として氏子区域が形成されるに至った理由には東寺と伏見稲荷大社本社の立地が大きく影響しているものと考えられる。当時の伏見稲荷大社は人々の居住圏である平安京から大きく外れた山中に存在しており、周辺で民間の信仰を広めるには立地が良くなかった。その一方で東寺は平安京の中にあり、民間の信仰を広めていく中で都合がよかったためにこちらを中心として氏子区域が形成され、現在のような本社と氏子区域が乖離する特異な位置関係が形成されたものと考えられる。



言える。千本鳥居で有名な伏見稲荷であるがその鳥居の数は山全体でみると1万以上にものぼり、そして今日においてはその殆どが企業によって奉納されている。つまりは1万社近くの企業が稲荷を信仰しているということになり、商業神として稲荷が非常に大きな勢力を持っていることが見て取れる。その企業の中には多くの人に知られる大企業も含まれており、特に有名な例としては三菱グループなどが存在する。三菱グループが信仰する土佐稲荷神社に関しては元々土佐藩蔵屋敷にあった祠に伏見稲荷から稲荷神を勧請して土佐稲荷神社という名称となった物が明治期に三菱グループの創設者岩崎弥太郎の所有物となり、現在では三菱グループに属する企業の多くから信仰を集めている。

また特に稲荷と特殊な関係にある企業として挙げられるのは京阪電鉄である。京阪電鉄はその名の通り本線が京都と大阪を結ぶ鉄道であるが、その中の伏見稲荷駅はこの会社のドル箱であると言われているらしい。それもそのはず、伏見稲荷への参拝者は年間で1000万人以上、初詣だけでも200万人以上が訪れるといわれている。JR稲荷駅という商売敵が近隣に存在はしているものの、それでもその利益は膨大であり、まさに商業神による『御利益』を受けているといえる。そして、京阪電鉄と伏見稲荷との特殊な関係というのは、そもそも京阪電鉄が伏見稲荷の参拝客を目当ての一つとして開通したという経緯が挙げられる。当初、京阪電車を敷設するにあたって、採算をとる為に注目されたのが大阪の天満宮と伏見稲荷大社の二か所である。その為、最初に京阪電鉄が敷設されたのは大阪の天満宮と京都の五条大橋の間であった。そしてその目論見は当たっており、開通翌年の正月には五条駅は初詣客で大混雑し、発足直後であるにも拘らず京阪電鉄は黒字を出すことに成功している。このような例は京阪電車に限った話ではなく、日本の鉄道は黎明期において神社仏閣の参拝客を目当てとして敷かれていたという。それを示すように、現在においても京阪電鉄の沿線には八坂神社や清水寺、石清水八幡宮に東福寺、桃山御陵など数多くの神社仏閣、史跡が多数存在している。そんな京阪電車は本社に加え各施設で稲荷を祀っている。まさに商業神を祀って繁盛し

ている企業の典型例といえる（内藤憲吾 2018）。

次に実際に稲荷山山中に鳥居を奉納し、稲荷を信仰している企業はどのような意識をもって信仰し、行事を行っているのかに関する調査に関して記述する。

#### ・「株式会社タイルメント」

株式会社タイルメントは名古屋に本社を置く1953年設立の建築用接着剤を主として製造・販売している企業である。この企業が稲荷を信仰するに至った経緯として、終戦時創業者である小林盛人氏が広島・呉の海軍航空基地から名古屋へと帰る途中、立ち寄った京都で占い師から託宣を受けたことが信仰の発端となっている。その後同氏が企業を立ち上げ、現在に至るまでタイルメント内で稲荷は信仰され続けている。実際に社内で行われている行事としては、まず1月15日に役員総出での伏見稲荷大社へ参詣し商売繁盛、家内安全、無病息災の祈願、2月には大垣にある工場にて社長以下役員、組合役員、関係者が参列し、神主を呼んでの初午神事が行われている。

#### ・「洲本ガス株式会社」

洲本ガス株式会社は兵庫県洲本市に存在する昭和4（1929）年設立のガスの製造・販売、およびガスに関する器具の販売、ガス工事を事業内容とする企業である。この企業が稲荷を祀るに至った詳細な経緯に関しては資料が残っておらず不明であるが、設立当時の社長の意向であったことは確からしい。社内の稲荷社は設立当時から存在しているとのことである。行事としては年に一度の初午神事のみであるとのこと、前述のタイルメントに対し社員揃っての稲荷参詣は行われていないとのことであった（社長個人での参詣はあり）。一方の初午神事に関してはタイルメント同様神主を呼び、社長・社員そろっての神事が行われているとのこと。

#### ・「株式会社リーガルコーポレーション」

株式会社リーガルコーポレーションは現在千葉県浦安市に存在する靴の製造・販売・修理を行っている企業である。設立は明治35（1902）年であり、その当時の社名は『日本製靴』であった。また名前のほかに本社の所在地も変わっており、2010年までは東京都の足立区に在していた。社内の誠加稲荷社で稲荷を祀っており、その関係は

## 伏見稲荷から見る稲荷信仰の多様性の研究

1942年から始まっているという。この誠加稲荷社は2010年の企業の移転の際にも同時に引っ越してきており、企業との強いつながりがみられる。行われている行事としては二月の初午で、前述の二例同様に神主を呼んで商売繁盛、家内安全を祈願する。

以上の三例に共通する点として、初午神事が挙げられる。ここでは省略するがその他の社内に稲荷を持つ企業においても初午神事は稲荷を信仰するほぼすべての企業において行われており、企業内稲荷における神事としては最もオーソドックスな神事であることが伺える。また伏見稲荷への参詣も行われているが、これに関しては時期や規模・そもそも行うかどうかに関しても企業によってまちまちである。その他の神事に関して特別に行うという話は今回の調査では確認されず、日々の社へのお参りがある程度とのことから稲荷に関して特別に何か行事を行うのは年に一回、ないし二回程度が企業における信仰の中では一般的であると思われる。

稲荷に限った話ではないが、このような企業での信仰の意義としては同一の信仰対象及び社内行事を行う事によって自身が共同体の一部であるという意識を強めることを目的としたものと考えられる。かつての村落における神社と同様の働きを企業内に形を変えて存在しているものと考えられる。

### 3-3. 鳥居の年代に伴う傾向

稲荷山山中を歩き鳥居群を見ていると、朱塗りの鳥居の中にぼつぼつと石造の鳥居が紛れ込んでいるのが見て取れる。現在稲荷山山中に存在する鳥居の大部分を占める朱塗りの鳥居は耐用年数4～5年ほどであり、劣化した物から取り換えられていく。一方で石造の鳥居は建てられた年代が古く、明治・大正期の物も存在し、鳥居の奉納という形での信仰が古くから行われていたことをうかがわせる。これらも先述の調査同様に鳥居の裏に刻まれている奉納者の情報から傾向を調査していくと、まず地域的傾向として近畿地方が最も多く、東京・名古屋などの数が多いなど、地域的な傾向に関しては木造の鳥居と大きく変わらないことが見て取れる。その一方で木造の鳥居との大きな差異として挙げられるのが奉納者の傾向である。木

造の鳥居が企業による奉納が殆どであったのに対し、石造の鳥居では個人・講単位での奉納者の割合が多いことが見て取れる。ただし、企業による奉納もこのころから存在することからこの明治・大正期が個人や講での奉納から企業による奉納への過渡期であった可能性も考えられる。

## 4. 塚から見る信仰

### 4-1. 奉納者の分布

稲荷山に登っていると参道に建てられた巨大な鳥居に目を奪われがちになるが、その一方で各所に小さな鳥居が立て掛けられた小さな祠のようなものが点在しているのを確認できる。これらは塚と呼ばれるものであり、その総数は鳥居の総数にも近い10000基近くもの塚が存在するとされている(中村陽, 2009)。本項では、まずこの塚に関して鳥居での調査同様に奉納者の分布からその傾向を調査していく。調査方法として塚自体には奉納者の居住地の記述は存在していないが、信仰者によって塚の前に立て掛けられた小さな鳥居に奉納者の住所がかかかれている為そこから124基をリストアップ、地図化を行う。

まず大まかな地方別の傾向としては鳥居のデータと同様に近畿地方に数が集中している事や県別に見ると大阪(34件)・愛知(17件)・東京(11)



図4 塚の信仰者の分布図

などに数が集中している点など一致点がみられ、商業神的な影響がここにも及んでいることが見て取れる。一方で鳥居のデータで数の多かった神奈川・兵庫が大きく数を減らしており、岐阜や奈良といった地域が数を増やしているという差異もみられる。またさらに詳細な地域に関して見てみると大阪府においては鳥居で多数の件数を占めていた大阪市が数を減らしており、34件中8件にとどまっている。このことから塚での信仰において商業神的性格以外の影響が存在していることが見て取れる。

この差異の原因として稲荷山山中における塚の成り立ちが関係しているものと考えられる。伏見稲荷大社が公式として発表している塚の定義とは稲荷大神に別名を付けて信仰する人々が石にその神名を刻んで奉納したものということになっている。実際伏見稲荷主導での塚の設置も行われており、前述の商業神的な影響はここに起因するものも存在していると考えられる。一方で実態としては、明治期に発令された神仏分離令において神道か仏教いずれかにカテゴライズすることを迫られた小さい諸宗教が稲荷信仰に組み込まれ、稲荷山山中にそれぞれの拠点を構えた物も中には存在している。上述の「商業神的性格以外の影響」という物はここに起因するものであると考えられる。これらの塚は明治新政府及び伏見稲荷からは禁止の方針が出されてはいたものの、密かに信仰は続けられ、また伏見稲荷としても強制的に立ち退かせることもできず昭和37年にはついには伏見稲荷本社として塚の建設を許可するに至った。とはいえ、伏見稲荷の公式見解としてこの塚はあくまで稲荷を別名で祀った物であり、他の宗教によるものであるということは認められていないことから、現在においても伏見稲荷大社はこれらの存在をあまりよくは思っていないという側面も見て取れる。とすれば、疎ましいはずの塚を自分たちの手によって増やす理由として考えられるのは、講務本庁が主導して稲荷講による塚を増やしていくことによって前述の「稲荷大神に別名を付けて信仰する人々が石にその神名を刻んで奉納したもの」という説を強化し、大衆の認識として塚という物が稲荷信仰に起因するものであるとの印象を強めることが目的であると考えられる。

#### 4-2. 信仰の実態に関して

では、実際に塚の信仰者は実際にはどのような信仰を行っているのか。以下ではいくつかの実例と共に考察を進めていく。

・S氏

塚の神名は「豊春大神」。特筆すべき行事として毎年初午の後の適当な日に「講」と称した近所の農家の集まりが行われている。「講」に際して各家持ち回りで「宿」という役割を当てられ、その家は庭に幟を立てる。「宿」は十数年前までは集まりを催す家を指していたが、現在では近所のすし屋に集まるとのことで現在の宿の役職は専ら前述の幟立てと集まりの幹事役であるらしい。当初は昼に集まっていたが、宴会で丸一日潰れることが常であったため現在では夜に行うようになったとのこと。また当日の朝には藁苞にもち米とあずきを混ぜて炊いたものを入れて近所の祠に奉納する。伏見稲荷大社への参詣は、かつては全員で行っていたようだが現在では個々人の都合のいい日取りで行くことになっているとのことであった。

この例では信仰者が農家の集まりであるということから農業神的な影響が強くうかがえる。注目すべき点として、「講」というものがコミュニティの名前としてではなく集会自体の名前とされている点が興味深い。後述するいくつかの例において講というのは特定の信仰を持つ人々の集団そのものを扱う語として使われていることが一般的であるが、元来の講という言葉が仏典の講話のために集会を指す語でもあったことを鑑みるにこの地域では原初的な使われ方をしていることが伺える。また「講」の朝に行われる藁苞にもち米とあずきを混ぜて炊いたものを入れる風習は稲荷信仰における寒施行に多くみられることからこの「豊春大神」は農業神的な影響を強く残す稲荷神の形であると思われる。

・A氏

塚の神名は「小女郎明神」。この塚の信仰者達の間では稲荷講が形成されており現在稲荷講全体として行われている行事としては寒施行のみであるとのことである。かつては講員全員での稲荷詣や個別の集会が行われていたとのことであるが、現在では稲荷詣は個人、あるいは都合の合う数人で、集会は寒施行に併合して行われるようになった。

## 伏見稲荷から見る稲荷信仰の多様性の研究

たとのことである。この講で行われる寒施行の特徴としては日取りが稲荷において多くみられる2月の午の日ではなく3月の午の日に行われるという点があげられる（但し現在では集まりやすさを考慮して直近の日曜日に行われている）。内容としては小女郎大神の祠に併設された御供棚に供え物を各自備えていき全員が揃ったところで厄男・厄女の健康祈願が行われる。但しこの際唱えられるのは祝詞ではなく般若心経であるとのことで、神仏分離令以前の仏教との繋がりが比較的強く残っていることが伺える。その後は供え物を配る御供撒きが行われ、この神事は終わりとなる。御供撒きの行事は通常高所から餅などを撒くことが一般的であるが、この地域ではこの御供撒きに参加するのが近所の子供たちである為（前述の日程の変更も子供たちの集まりやすさを考慮してのことであるとのこと）直接手渡しで行われている。講員の職業自体は農家や商家等の特定の職業層に偏りがあるということはないらしく、講に加入した経緯に関しても自発的というよりは周囲に勧められてというパターンが多いのではないかとのことであった。

この例では職業的な統一性がみられず、その伝播の経緯も主に周囲からの誘いであるとのことからこの『小女郎明神』は現在においては宗教的組織というよりはコミュニティにおける媒介役としての性格を強く持っているものと考えられる。

・E氏

塚の神名は「光姫明神」。前述の小女郎明神同様に信仰者の間で稲荷講が形成されている。講員は現在6軒の家で構成されているとのことであるが、かつては倍以上の講員で構成されていたとのことである。この地域では講ができる前から「正一位 大明神」と掘られた稲荷神の石塔が存在しており、当初は各々の家の庭先に稲荷を祀る形で信仰が行われていたという。そうした人々によって形成されたのがこの地域の稲荷講である。現在行われている稲荷に関する行事としては寒施行と講の集会のみであるとのことで、稲荷詣に関しては特に熱心な人のみで全員が全員行っているものではないとのことである。行事の日程は講の初集会の際に決定される。寒施行では山中にあるいくつかの石塔や祠に小豆飯の握り飯と油揚げを供え

て回るとのことである。豊春大神や小女郎大神と同様の行為がみられる。但し信仰の意識に関しては「今まで（先代が）していたから自分たちも惰性でしている部分はある」とのことであり、講員にとってこの行事の宗教的意義は薄れていっていると感じる部分もあるとのことであった。

この三つの例を並べて考えると、まず共通する点としていずれにおいても寒施行、或いはそれに準ずる神事が行われている。企業での信仰における初午神事同様に、こうした塚における神事としてオーソドックスな神事であると考えられる。但しこの寒施行が行われる時期から鑑みるに初午神事の一例として行われている可能性も考えられる。また、もう一つ注目すべき点としていずれも元々行われていた行事に比べて特に稲荷詣の行事において規模の縮小化が認められる。豊春大神や小女郎大神の例ではかつては講員全員によって行われていたものが個人による参詣へと形を変えている。神道における講という存在の目的として本社への参詣というファクターが重要視されていたことを鑑みるにこの縮小化は講の存在意義が現代において周辺地域のコミュニティにおける中心的存在に重きを置くように変化してきているというように考えられる。

以上の三例は稲荷の信仰から形成された講から成る塚の信仰者であると思われるが、前述の通り伏見稲荷山中の塚の中には他宗教によるものも存在している。今回その実例の聞き取りは行えなかったものの、その顕著な例はいくつか稲荷山山中で確認することができる。特に大きなものとして、眼力大神などはその最たる例である。詳細な由緒は不明であるものの伏見稲荷大社の本殿が建てられるより前、1200年前から眼の神として祀られている。その主たる御利益は農耕神としてや商業神としての大きな範囲での御利益を持つ稲荷信仰とは大きく離れ、眼に特化した限定的な健康祈願の御利益となっている（但し後から「先見の明」という言葉などにかけて商売人による信仰が付加されている）。またその眼力大神の祀られている眼力社のそばには常吉大神という電気関係の仕事をしている人々に限定し御利益をあたえる神も存在している。ほかにも足腰の病氣平癒を御利益とする腰神不動尊など比較的限定的且つ生活

に直結する利益を持つ神が多く、民間信仰や流行り神的な性格が強くみられる。

また、他に信仰者数が多い塚として白龍大神なども挙げられる。その御利益に関しては多岐にわたり、大阪市北区に在する網敷天神社では縄文時代の円錐形の建物に端を発する屋敷神として扱われている。また大阪市浪速区の日本橋に存在する日東白龍大神では旧日東幼稚園に併設されていたこともあり、万病平癒・五穀豊穰・経済発展に加え子供の守護も御利益に加えられている。さらに中崎町に祀られている白龍大神の利益はさらに多岐にわたり、商売、芸術、健康、子宝、縁結びなどにも及んでいる。また日東・中崎町の白龍大神に関してはいずれも三つ鱗の紋が飾られている。いずれにしても生活に近い形での御利益が多く、稲荷信仰とはまた別の信仰として展開していることが伺える。この稲荷とは全く違う形での信仰が行われている白龍大神が稲荷山山中において一大勢力を気付いている理由として稲荷信仰の旧態が関係しているものと考えられる。現在において稲荷信仰の象徴といえば狐であるが、元来稲荷神たる宇迦之御霊神の眷属は蛇であった。そもそも山をご神体として展開する宗教は山自体をとぐろを巻いた蛇の姿と重ね、蛇を眷属とすることが多かった。それは稲荷山をご神体とする伏見稲荷も例外ではなく、旧社紋や山中に多数存在する滝など蛇神信仰の名残を数多く残している。こうした旧態の蛇神信仰の名残として残っているのが伏見稲荷山中に多数存在する白龍大神であると考えられる。この白龍大神は名前の通り龍(蛇)神であるが、日東白龍大神の世話人が三輪系の講であることから三輪神社に関連する神であることが伺え

る。三輪に属する神である白龍大神は一見稲荷と無関係であるように思えるが、この稲荷山周辺の地域は渡来系である秦氏が稲荷信仰を興す以前、三輪系の紀氏、賀茂氏の管轄地であったという歴史が存在する(そもそも伏見稲荷が在する氏子区域の氏神である藤森神社は紀氏・賀茂氏系の神社である)。となればこの白龍大神はかつての三輪系が支配していたころの稲荷山における信仰が形を残した姿であるといえるだろう。

また、塚とは異なる形ではあるものの稲荷山山中には大日本大道教という宗教の本部や天照大神を祀る伏見神宝神社も内包しており、稲荷に限らず多様な信仰が根付いた土地であったことが伺える。

## 5. 講から見る信仰

### 5-1. 講自体のシステム

次にここまでもに数度話に出てきた講について見ていく。前章で少し触れたが、講とは平安時代の仏典を講読研究する集会・或いはその集会に集まる僧衆の集団名に使われたのが最初で、時がたつにつれ従来の様々な信仰集団に講の名称を付ける風習が一般化されたと思われる。現在では講社として同一の信仰を持った人々の集団に用いられており、中でも稲荷信仰を持つ人々によって形成された講が稲荷講と呼ばれている。

現在伏見稲荷大社における稲荷講は講務本庁を置き、講員加入や行事に関してはシステム化されている。加入の方法に関しては加入申込書に郵便番号、住所、氏名、年齢、講員種別を記入し、講費を添えて伏見稲荷に届け出、或いは郵送する形となっている。前述の講員種別に関しては支払う講費(年間)によって区別されており、2000円で正講員、3000円で特別講員、7000円で名誉講員となっている。各講員の差は講員大祭の記念品等が挙げられる。講員全体が受けられる特典としては、

- ・ 講員加入の際にはご神前に奉告し、一代守・講員カードが授与される。
- ・ 毎日朝夕の二回本殿で家内安全・生業繁栄の祈願
- ・ 講員大祭への参列。大祭記念品・撤下御饌・稲荷などの贈呈。

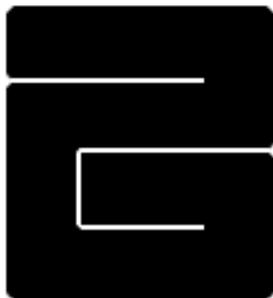


図5 伏見稲荷大社旧社紋

## 伏見稲荷から見る稲荷信仰の多様性の研究

- ・年4回機関紙「大伊奈利」の贈呈
- ・講務本庁主催の普通指導者講習会への参加権
- ・講員を多数取りまとめるものにあたっては支部の設置・支部長の嘱託。
- ・支部長且つ講習を修了した者には教会教師の資格が与えられる。
- ・大社参集殿での宿泊、休憩に関して便宜・特典が与えられる。

といった内容が挙げられる。

### 5-2. 鳥居の講・塚の講

現在伏見稲荷大社社中において明確に講の存在を認められる形としては鳥居・塚の二種が存在する。本項ではこの鳥居の講・塚の講における違いに関して記述していく。

まず塚における講に関しては、前述の通り塚という物の成り立ちが他の諸宗教が明治期の神仏分離令に伴い稲荷に統合されたという経緯を鑑みるに、この他の諸宗教の講が基となって塚が形成された形と、稲荷によって形成された塚が両存する形になっていると考えられる。一方で鳥居の講であるが、こちらは前述の講務本庁が主導する形で形成された稲荷信仰による講であると考えられる。理由として、前述の塚による諸宗教の信仰では塚の前に小さな鳥居を個人単位で奉納するというスタイルが確立している点にある。稲荷以外を信仰している団体が比較的高額な鳥居を稲荷のテリトリーである参道にわざわざ奉納するとは考え辛い為、逆説的にこちらは稲荷信仰によるものと考えられることができる。

### 5-3. 講における信仰の実例

次に講における信仰の実例に関して記述していく。実例として、久下正史氏の『キツネとダイサン：大阪府泉南部の事例から』（久下正史，2009）からみていく。まずこの地域、大阪府泉南郡田尻町における講はダイサンと呼ばれる宗教者を中心としてコミュニティが形成されていた。ダイサンとは伏見稲荷で修業をした宗教者であり、神の「台」となる人という意味からダイサンと呼ばれる。田尻町においてキツネは、固有名を持ち伏見の塚を本拠とする人々に福や指図を与える神としてのキツネと、明確な本拠を持たず空腹によって

人に害をなす悪い神（広義にヨツアシモンと称されるもの）の二種に分けられていた。固有名を持つキツネは伏見稲荷の塚を本拠としてそこから各地を回り、居を定めた場所で祭祀要求として怪異を起こし、ダイサンを通じて祀られるようになる。怪異の例としては人々を受けにはめたり人の体に不調を起こしたりと人に危害を与えるような行為も往々にして行われている。その後は祀るものに様々な指示を与え、その家の氏神として福をもたらす存在となる。また、自らの家に積極的にキツネを迎えることもでき、その場合には伏見稲荷でお札を受け、ダイサンの祈祷の下神名を伏見稲荷の塚で確認して固有名詞のついた神として祀る。一方で人々に病気などをもたらすキツネは、ダイサンによって存在が確認されると辻に供え物を置きそれをキツネが食べることによって悪影響が解消される。このキツネは人間の生活圏内をうろついており、広い屋敷などの特定の場にとどまることもあった。この狐が悪さをする理由は空腹にあり、一時的に餌を与えること以上の祭祀行為を求めることはないとされている。このように田尻町内でキツネによる霊的現象と人々に認識されている現象に対し解決する役目を持っていたのがダイサンであった。ダイサンは榊をもって般若心経を唱えることによって神の依り代となる。この間ダイサンの意識はなく降りてきた神様と人々が直接対話することとなる。また上記のようなキツネと人々の媒介のみならず、病気や失せもの、家相などの多種多様な相談も受けており、高い評価を受けていた。

このようにダイサンのもとには評判を聞いて祈祷を訪れる人もいたが、中でもダイサンによって神を祀ってもらっている人々で構成される組織が『神徳講』であった。講員は五十から六十軒あり、主に商売繁盛を祈願する人々で形成されていた。講の中には役員と呼ばれる家が二十軒ほどあり、役員は祭礼の際の準備や掛け金を他家より多く出すなど負担も大きかった。神徳講内で実際に行われていた行事としては、毎月8日の祭りとかんせんぎョウ、イナリヨセ、土用と寒のお塚参りが挙げられる。各行事に関して見ていくと、まずかんせんぎョウは寒の数日間の内に行われ、白飯或いは小豆飯のおにぎりや煮干し、刻んだ揚げ

をヘギに包んで備えて回る行事で、置くべき場所はダイサンに降りてきたキツネが指示していた。次のイナリヨセは二の午の日に行われた。七輪で釜をたいて釜鳴を起し、釜鳴が始まるとダイサンに講員の祀る神々が順次降りてくる。講員は自身の祀る神が降りてくると世話になっていることに礼を言い、時には指示を受ける。最後にダイサンの神であるマメコサンが降りてきてこの行事は終わりとなる。また、釜鳴の音で吉凶を占う物もいたという。最後のお塚参りは寒の時期に行われ、講員全員で伏見稲荷の塚へ参拝に向かう。この日程は、後に1月25日に固定されるようになった。伏見稲荷に到着してからはダイサンが講員の神の塚一つ一つに拜んで回る。かつては講員全員でこれに着いて回っていたが、後に銘々に回ることとなった。また、「ついで参りは悪い」と最初のころは言っていたがのちには万博や寺院にもよるようになった。

この例は宗教者を中心として形成された稲荷講の例であるとみられる。宗教者という直接的な指導者がコミュニティの中心として存在しているためか4-2で取り扱った三例と比べてより宗教的特色が強いことが特徴といえる。一方で塚巡りに関しては他の三例ほど顕著ではないもののやはり簡略化がみられ、こちらでも講における行事の重要性の遷移が起こっているとみられる。

## 6. まとめ

ここまで各要素に分かれ稲荷信仰について見てきたが、これらの間には相関関係が存在するのだろうか。各要素に関して要約しつつ一つ一つ検討していく。まず、他の要素と明確に一線を画しているのは他宗教による塚の存在である。これに関しては4-1で述べた通り元々は明治期の神仏分離令によって稲荷信仰に統合された諸宗教の形であり、伏見稲荷大社公式としても否定的な存在である。そのためこれらの多くは稲荷山山中に存在する他の信仰とは信仰者層も重ならず、独立しているものであると考えられる。但し眼力社や腰神不動尊のように比較的大規模な社を持ち、健康や生活に直結する信仰に関しては近隣地域や氏子区域の人々の信仰を得ている可能性も考えられる。

一方で塚の中でも昭和37年の塚信仰解禁以降、伏見稲荷が主導する形の稲荷神としての塚信仰を行っている人々、これに関しては講務本庁による稲荷講によって形成されている信仰者層であると考えられる。この人々はつまりは鳥居から見られる講と同一の信仰者層である。一方で鳥居から見られる信仰者のもう一つの姿としては企業による信仰という物も存在している。これは講という物を形成せず、企業という組織の下で完結しているために前述のいずれの信仰者層とも重ならない、独立した信仰者層であると思われる。また信仰者層としても一つ見られるのが氏子区域内に在住する氏子である。T氏の発言にあったようにこの信仰者層の人々は講を形成しないのが通常であると考えられる。理由として考えられるのは、(乖離している状態とはいえ)本社が近くにある状態で小地域ごとに分かれて稲荷詣や寒施行、初午などの行事を行うコミュニティを形成する必要性は薄く、稲荷講に多くみられる信仰の中心的存在(近隣の稲荷神社、祠、宗教者等)を伏見稲荷大社が担っているため特別に講が形成されることはないものと考えられる。これらを整理すると、現在伏見稲荷には少なくとも四つの信仰形態が混在していることとなる。まず、明治期の神仏分離令によって稲荷に統合された諸宗教。次に講務本庁が主導し、構成している稲荷講。本社とは離れた場所において展開されてきた氏子区域。そして、参道に鳥居を奉納することによって商売繁盛を祈願する企業。これら四つの信仰(或いはさらに別の信仰形態)によって、伏見稲荷大社の信仰は形成されている。そのうち、企業による信仰と氏子による信仰に関してはそれぞれ独立した信仰形態を持っているものとみられる。残る二つ、明治期の神仏分離令によって統合された諸宗教と講務本庁の主導による稲荷講に関しては信仰形態において一部の合致がみられる。その合致部とは塚を用いた信仰である。この合致に関しては伏見稲荷側によって塚の信仰が稲荷信仰によるものであるとの見解を強化する目的で意図的に合致させられたものであると考えられる。

以上を総合するに、伏見稲荷において多様な形で存在する信仰はその形態の成り立ちという面を鑑みるに、前述の通り稲荷講からなる塚は他の諸

## 伏見稲荷から見る稲荷信仰の多様性の研究

宗教による塚の信仰と合致する形で作られたものであるし、参道における鳥居の奉納は講や個人によるものが主であったと思われるものから現在においては企業による奉納が中心になるなど、表出化した信仰の形態に関しては他の信仰形態を踏襲して行われる等の関係がみられ、この部分では相関関係が存在しているといえる。一方でそれらの中で行われている信仰の実態に関しては互いにかかわりあって何かを行うといったことは見受けられず、同じ伏見稲荷大社という場所にありながらそれぞれが独立して信仰を行っているものと思われる。

以上が伏見稲荷大社内における信仰とそれらの相関関係についてである。今回の論文では主に商業神・農業神・氏神としての稲荷信仰の側面を確認できたが、むろん稲荷信仰全体から見ればこれらの側面は氷山の一角に過ぎないが、一つの信仰の総本山たる地に此処まで多くの信仰の形態・信仰者の種類が内包されているのは極めて稀有な例であるといえるだろう。

## 【参考資料】

- ・本多健一，2015『京都の神社と祭り』中央公論新社，pp61-76
- ・芳賀矢一，1921『攷証今昔物語集』下，富山房，p.565
- ・藤原定家，1912『明月記』第3，国書刊行会，p.85
- ・中村陽，2009/11/10『稲荷大神』戎光祥出版，p.18, 88, 94
- ・内藤憲吾，2018/10/4『お稲荷さんと御利益』洋泉社，pp.70-71
- ・久下正史，2009.03『キツネとダイサン：大阪府泉南部の事例から』鶴山論叢（9），p1-18
- ・「よくあるご質問 伏見稲荷大」社  
<http://inari.jp/about/faq/>
- ・「藤森神社縁起」  
<http://www.fujinomoriinjya.or.jp/enngi.html>
- ・「弘法大師行状絵巻 巻八 | デジタルミュージアム | 和泉市久保惣記念美術館」  
<http://www.ikm-art.jp/digitalmuseum/num/001/0010435.html>
- ・「第7回 お稲荷さん | 沿革 | タイルメント」

<http://www.tilement.co.jp/company/history/07.html>

- ・「リーガル シューズストリート レポート」  
<http://www.shoes-street.com/2011/02/seikainari.html>

- ・「京都伏見稲荷の眼力社」  
<http://www.ganrikisya.com/index.html>

- ・「講員加入の案内」  
<http://inari.jp/office/info/>